

## 仏法は自然です

問

久賀谷君代

先生、お懐かしゅうございます。先日はお目にかかり、ひとかたならぬお導きにあずかりまして、まことにありがたく厚くお礼申しあげます。先生にはその後お変わりはありませんか。先生、私は昨年八月号の光明雜誌を読ませていただきましてより、先生にお会い申してお論しにあずかりたいと思つていましたが、まだお目にかかることができませんでしたところ、友岡様より先生がお出でなさっていることを聞かせていただきました時のうれしさは、ひとかたではございませんでした。それにただ半日のお暇をもらつて参つたので、真に徹底するまで聞かせていただくことのできないで帰らねばならなかつたのが残念でなりませんでした。後にひかれつつ涙とともに帰りました。先生ふびんと思つてしぶとい私をどうかお導きくださいませ。後日にも参らせていただきたいと思ひながら、止むを得ぬ事情のために出ることができませんでした。心は先生のみもとにいなながらご因縁なく残念でなりません。先生、かわいそうと思召して悶える私をお論しくくださいませ。先生、私はどこでお聞せにあずかりまして、おてもとがぬけておるとか、退歩だとか申されますが、私にはどうしてもおちきることができません。先生、ここをどうしましょう。ほんとに苦しくてありません。ただただわがはからいとは思いつつも、あきらかになりたい、疑いはれない、安心がしたいとその心がやみません。どのようにおきかせにあずかりましたら、真実私をはなれてくださらん親様を見出すことができるでしょう。親様と仏との間にどうもどうもというように聞き開くことができます。どのような心で聞いたなら真に目覚めることができます。苦しいのです。私にはまだほんとの菩提心がおきないから聞かれぬのだと存じます。心の奥底はただぼんやりとしてまじめになつてくれません。いかにこの身はなろうとも求めずにはいられません。聞かずにはいられません。煩悶すればするだけ真のお知識をしたわすにはいられません。先生どうかきびしいきびしいご意見をくださいませ……以下略す……

お答え

□ 寒い冬の日の夕暮、涙ながらに峠をこして帰つて行かれた法師二人、思えば道を求める者の厳肅さに、涙せずにはいられません。もしあの翌る日の講演を全部お聞き下されば、何とかお心持も変わったであろうにと残念に存じました。以下ご質問の要点をひらつてお答えいたします。

一、「私にはどうしてもおちきることができません。」

あなたはおちきらなくても、そのまま、六道輪廻のどん底におちきつているものだとは思えませぬか。そのままがどん底ではありませんか。どん底でないものがどうしておちられましよう。おちなくても、そのままがどん底です。自分の毎日考え、

語り、なす、その事をほっておいて、どこにおちている自分が見えましよう。もとよりどん底なのです。ただ考え、聞くことによつて見出せるまでのことでもあります。夜半静かに胸に手をおき考えてください。今の今こそそのままでもどん底ではありません。せぬか。三毒五欲の泥の中にうもれて浮かぶ瀬のない私どもです。智慧の眼が開けてくればくるだけ、浮かぶ瀬のない私どもです。一切人類はその大部分が、糞の中にいて糞の汚さを知らずに暮らしています。けれども、仏智の光がわが内に輝いてくださればくださるほど、いよいよ助かる縁なき悪衆生なのです。あなたはまだおちきる手続きがふみたいほど自分を高く買っていますか。また何がゆえにおちきりたいのです。それはお浄土をつかもうとする恐ろしい魂胆です。

一、「はなれぬ親様」

お慈悲に顔が輝いている人や、静かに合掌している人や、懸命に道を求めている人を見ました時、私はそれがたつた一人とは見えないのです。見えぬある者、それはすぐ衆生になりきりたまひし法蔵のみ姿ではありません。あなたは求道のために一足をわが家からふみ出した時、その一足があなたによつてなされたと考えますか。手一つ殊勝にも合わせている時、その手の裏には何物もないと考えますか。巖に矢の立つためしあり。世の多くの人たちが、ただ金銭欲に動いて仏とも法とも生命とも何とも考えていないのに、巖にも等しい宿業の塊がついに動き出てまいりました。その力その力、その力はいつたいどこから来たのだ。巖を動かしたその力が、あなたをはなれてどこにある。まことに仏はあなたの求め心にまでなつています。はなれませぬ、はなれませぬ。衆生の罪濁のあるところ悩みのあるところ、そこには雄々しくも痛しくも如来はかの衆生と一体になりたもうて、正覚の果名、南無阿弥陀仏と名のりたいために血みどろになつていられます。仏は断じてお浄土で居眠りをしてはいないのです。あなたが求めねばおかぬその心は、すぐそのままが如来の救わねばおかぬの願力であります。あなたがおこしたその願ではないのです。如来の真心を度衆生心（衆生を濟度せねばおかぬ仏心）と言います。その度衆生心はそのまま、あなたの胸の内に現われたまいて、あなたの求道心とはなつたのです。

一、「真の菩提心のおこることを」とのおたずねです。

菩提心はそのまま如来のみ心であつて、あなたの心ではないのです。もつともここでは求道心のことを菩提心ととつてありますが、先にお答えしたのでおわかりくださつたでしょうが、菩提心は自然のものなのです。おこそうとしておこし得ず、止めようとしてとどめることはできぬのです。ここに言つておかねばならぬことは、いよいよ求めることが本気になればなるだけ、いよいよ真に求めてくれない自分が見えてきます。真剣になればなるだけ、真剣にならないものが見えてきます。外がわから眺めた時あなたは真に真剣であります。本気で求める者だけ、本気になつてくれない自分が見えてくるのです。久賀谷さん、そこです。おちる機とは、目あての機とは、如来のはなれたまわざる機とは、その求めれば求めるだけ真剣になつてくれぬその機のことです。往生の一大事になくてはかなわぬ、あなたにとつて大事な大事な宝です。

どうか、その真剣になつてくれぬ、手におえぬ煩惱様を大切にして見おとさぬようになさいます。でないといふも消えてなくなりませ。

一、「あきらかになりたいたい。疑いはれたいたい。安心がしたい」

そうあせればあせるだけ、疑いもはれなければ、安心もできないのです。これについては「極楽欺偽」の記事をくり返してお読みください。あなたのはらには、だいそれた魂胆があるのです。結果を得て、ものにしようとする我慢があるのです。十九願、二十願、十八願と、三願転入をふまねばならぬ必然の径路として、やむを得ないことながら、その心は味もうるおいもないおそろしい心です。信心や安心をひきとつて、これでこれだと決めこみたいのです。腹に一物なくなつた時、如来の慈悲はあなたの胸のどん底からふき出るので。できあがつているのです。南無阿彌陀仏をよそにして、あなたの安心を作ろうとしますか。求めねばおけぬ心と、安心のできぬ心とは別なのです。求めねばならぬその心があればこそ、無上正真の一道をたどるのです。求めて求めて行くままが安心なのです。仏の願力に間違ひはないのです。人間のはからいでこれでよいのだと座りこめば、もうとどまつてしまつたのです。こうとしないことがしるしです。仏法は自然です。自然に生きてゆくままが南無阿彌陀仏なのです。これとかたまつたら自然ではないのです。心の底はぼんやりとしています。ぼんやりならこそ結構です。ぼんやりでないのにどうしてはつきりとしてお慈悲がいらしましうぞ。

聞きなさい聞きなさい。いつまでも求めなさい。けれども、求めてそれで何かにしよう、それでどうしようをやめなさい。求めたいままに求めてただ進みなさい。聞くたびに新しい味があります。極楽か地獄かそれはあなたの沙汰すべきことではないのです。